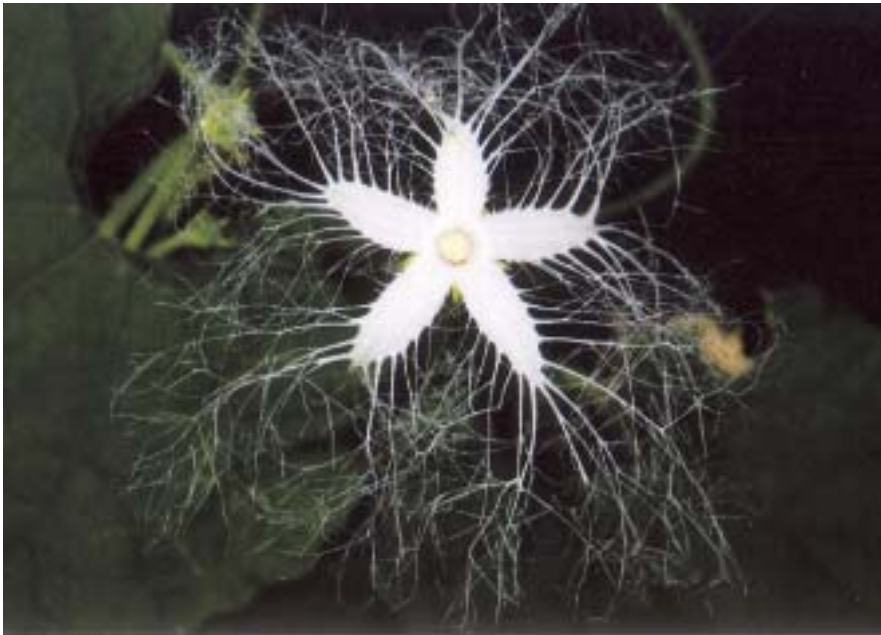


# カラスウリ

垣根や藪に覆い被さって葉を茂らせているカラスウリは、西瓜のような可愛い実や真赤に熟した実は注意をひきますが、花についてはあまり知られていないようです。この花が夜に咲くためでしょう。

カラスウリについては、明治の物理学者寺田寅彦先生の「からすうりの花と蛾」というすばらしい随筆もあります。

雄株と雌株が別の多年草で、雄花は房になって数個、花の下に小さな実のある雌花は一個、いずれも葉の付け根につきます。夏の夕方、薄暗くなった 7 時ごろ、棍棒のような蕾の頭が割れ始め、白い糸が噴出してきます。少し縮まっていた綿のような糸も 8 時頃にはすっかり伸びて満開です。妖しいまでに美しいレース飾りになります。寺田先生の文では、「開ききってしまうころになると、どこからともなく、ほとんどいっせいにたくさんの蛾が飛んできてこの花をせせって歩く。」と書いて



ありますが、なかなか虫は訪れませんでした。やはり東京は虫が少ないのでしょうか。

花は、先が 5 つに裂け、その縁から更に細い糸状の裂片が広がります。暗がりの中で、花弁を大きく見せ、蜜のある場所を知らせる蜜標の役目も果たしているのでしょうか。蜜は 6 cmほどのがく筒の底にあります。雄花では花粉の入っている葯が S 字に折れ曲がってがく筒の入口を塞いでいます。花びらに止まらず奥の蜜を吸える虫は、長いストローを持ち、ホバリングができる夜行性のスズメガの仲間となります。蜜を吸いにくくしていた変わった形の葯は、頭を突っ込んで来る蛾に確実に花粉を着けるためなのでしょう。

夜も10時ごろになると、盛りも過ぎ、縮みはじめます。夜明けには、濡れたテッシュペーパーの塊のようになって、見る影もありません。

それにつけても、あの繊細な花卉を蕾の中に畳み込み、絡み合うことなく広げていく巧みさに驚くばかりです。

いたる所に芽を出し茂っているカラスウリには、その増やし方に特別な方法を持っています。この多年草の植物は根に芋を持ち、毎年ここから芽を出し蔓を伸ばします。また、あの赤い実の中にも沢山の種が入っていて、鳥などに運ばれ、あちこちで発芽します。そして、もう一つの驚くような方法があります。8月ごろ、蔓の先が真っ直ぐ下に垂れ下がってきて土に潜り込み、芋を作るのです。次の年、そこから芽を出し新しい固体が出来るのです。クローンを後世に残す確実な方法ですね。



蔓が土に潜り込みできた芋

ところで、カラスウリの名前の由来は2つあります。一つは、いつまでも冬枯れの枝に残る赤い実をカラスの食べ残しと見立てたもの、もう一つは、美しい赤い実の色が唐から輸入した朱墨の原料となる辰砂(しんしゃ)に似るからとのことです。

現在は、赤い実を飾るくらいしか利用の機会はありませんが、かつては食べたり、薬にしたり、遊びに使ったりしました。青い実の中をくり抜いてお化け提灯にして子供の遊びに、カマキリの頭のような種を大黒天の顔に見立てたり結び文に見立てて財布に入れて招福を願ったりもしました。そのためカラスウリのことを玉章(たまずさ)とも呼んでいました。葉や芽は山菜として、若い実は漬物に、根から採った澱粉は団子にして食べたそうです。また、根から採った澱粉は天瓜粉の代用(本物はキカラスウリの澱粉)として汗知らずに、実や葉の汁、実の綿などはしもやけやあかぎれの薬として利用されました。ウリネ・ツチウリ・ヤマウリ・キツネノマクラ・ヒサゴウリ・クソウリ・ゴウリなど各地に多くの方言名があります。もう一度、じっくり眺め直してみたい植物ですね(篠原智男)。